

第二部

論文

国際貢献で村お興し

原 学

「『からいも交流』は、アジアとわれわれをへだてる見えない壁を、都市からではなく、地方から見た国際化によって突き崩そうとするささやかな試みである。もちろんこれが、アジアと日本の現実をきり結ぶ視座のすべてではない。しかし、それぞれ自分の足下を見つめ直すことによってアジアの現実に迫ろうとする様々な動きが日本各地で根を張るようになれば、これまでのアジア報道などではうかがいがい知れない多様なアジアがより身近な存在となるだろう」。

1987年4月号の雑誌「世界」に掲載された毎日新聞記者、長井浩氏による記事の一部だ。

国際社会に対する日本人の貢献について何か書いて欲しいと石積勝教授から頼まれたとき、まっさきに思いついたのが、鹿児島産のサツマイモをもじった「からいも交流」を紹介しようと思った。冒頭の記事で明らかなように、どこにでもある国際貢献活動の枠をはるかに超えた雄大なスケールの運動だったからだ。「だった」と過去形で書いたのは、残念なことにこの活動、組織内の問題などがあり現在は行われていない。それでも、日本の国際貢献を論じる上で、彼ら薩摩隼人の成したことは決して歴史の塵に埋もれさせてはならない示唆に富んだ野心的事業だったと思う。

国際貢献と巷に言われる活動を一瞥したい。

「国際貢献」という言葉をキーワードに、パソコンに打ち込むと出ること出ること。日本では様々な人間、団体が「国際貢献」が大好きなのだ、と思ってしまう。中央官庁から自衛隊、はたまた地方自治体まで、自称「international contribution」に従事していることが本当に良く分かる。「国際協力・国際貢献ナビ」「国際貢献・航空自衛隊オフィシャルサイト」「国際貢献先進県おかやま」と言った具合にネット・サーフィンしていくと一体何時間かければ終わるのかと思ってしまう。

「contribution」の意味を英々辞典で見ると、「the act of giving money, to help a person or an organization」と定義している。「金を与える官製の援助」

(ODA)は、政府が誇る最大の官主導型国際貢献だ。

民間主導型国際貢献でよく見かけるのは、貧しい国の子供たちのために寄付をお願いする活動だ。時には駅前でカンパをつのったりしていることもあるが、本当は寄付金が何に使われるか、怪しい場合もあるようだ。それに災害地へ支援物資を送ったりすること。昨年ならば、さしずめ地震に襲われたハイチ被災者への金銭的、物質的援助は間違いなく多くの日本人が関わっていると思う。

官製版と民間版の違いについてももう少し見ていこう。

官製版の典型ODAは、日本の援助で発展途上国の医療や教育制度に資金・技術協力などを提供したりすること。いわゆる政府資金援助というやつだ。橋や道路建設などを資金的に助けるのも含まれるが、これは日本企業がプロジェクトに参加したりすることもあるので、「自分達の金儲けにもしている」と批判されたりすることもあり、「貢献」の意味に相応しいか疑問が湧く人もいる。国家の貢献は対象国の政府が取り合えず相手になるから腐敗した政権の場合は、却って一般を苦しめることになる、と指弾されたりもする。余談だが、ODA国際貢献論で馬鹿馬鹿しいのは、政府が発表するODA国際寄付。日本は一番から二番に落ちた、などと嘆いている記事があるが、一番の米国ODAは武器援助が含まれていて、かなりの額がとうてい発展途上国とは思えないイスラエルへ行く。

最近の政府型「国際貢献」で印象に残っているのは、民主党政権が止めたインド洋での海上自衛隊の給油活動。保守系議員が、日本にとって「最も安く、最も目立つ」日本の国際貢献だったのに、と慨嘆していた。ちなみに、自民政権が給油活動を決めたとき、東京在住の某米国特派員は、腹立たしげな表情を顔に浮かべ、軽蔑気味の口調で「日本はずるがしこく立ち回っている」と言わんばかりだったのを思い出す。彼にとっては、「これが国際貢献かよ」と言いたいところなのだろう。

給油活動は、一体何に貢献してるのか、海上自衛隊の艦船が外国艦船に給油する事がなぜ「国際平和に対する貢献」になるのか。よく考えてみると政府型貢献策の限界が明らかになる。米国主導の西側有志連合が、アフガニスタンに跋扈する反政府武装勢力タリバンと彼らの一宿一飯の世話になっていると見られる国際テロリスト集団、アルカイダ・グループに対する掃討作戦を行っている。従って、日本の貢献は、海上の給油活動を通して「米主導の有志連合」に対する活動であることは明らかだ。だが、ゲリラ掃討作戦の巻き添えで悲惨な被害を蒙るアフガン一般の人々が後をたたないことも事実。そもそも、タリバンは絶対悪で、西側有志連合に絶対的正義があるのか。こ

う考えていくと、この国際貢献の正体は何だか訳の分からない話になってくる。

1990年の湾岸戦争で、「金しかだせない日本。多額の資金援助に関わらずイラクに侵略されたクェートに感謝されなかった」、「だから日本もこれから自衛隊を海外に出して『人的国際貢献』をし、『国際社会』から感謝されるりっぱな国になりたい」と、日本のエリート達は湾岸戦争トラウマを抱えながら、対外的に自衛隊を派遣する機会を広げてきた。が、戦争と紛争に関しては、どちらかの側に絶対的正義があるわけではないことを歴史が教えている。だから「貢献」といっても、特定集団のために、時の政権が「国益」になると考えて行ったという枠を超えるものではない。「国際平和への貢献」も同じ。平和の下での秩序のあり方が問題になり、戦争や対立が起きていれば、これまた、貢献といっても誰に対する、どちらにとって都合の良い平和かという問題が出てくる。

官製版は、時の政府が決めることだから、当該政府が考える「国益」を背景にしているのは当然。自民党政権が給油活動を決めたのも、「テロとの戦い」という曖昧な標語を掲げ、現実には米国を意識した西側有志連合が考える「国際平和」のための「国際貢献」を実施してきた。小泉政権が考えた「国益の観点」からの行動だ。「日本は米国に守ってもらっているのだから、お付き合いしなければ」という論理。だから、同じ論理を共有しない民主党政権ができた途端、この「国際貢献」はあっさりすてられてしまった。政府貢献の限界を示す出来事だ。

もっとも、同じ官製型でも、人間の安全保障のような、飢餓、環境などへの貢献は、より普遍的な価値への奉仕になるので、党派によって影響は受けないかもしれない。だが、国際貢献は民間が主導して行うべきことだと思う。国の貢献と政治的意図はコインの両面の関係。そうした損得勘定を越えて、人間同士が繋がっていくことを主眼に、国境、宗教、文化、民族を超えて行う点に国際貢献の意味がある。それは民間でしかできない。つまり非政府団体(NGO)による活動が最も向いているし、事実、日本の民間NGOによる対外活動は、ひと昔前に比べ目覚ましいものがある。

「カライモ」交流という民間版国際貢献を紹介したいのは、それが通常型のバージョンを強力にアップしたものだからだ。理由は、単に海の向こうの人々のお役に立ちたいという発想で始まった活動ではなく、そもそも疲弊する自分達の故郷の活性化をしたいという理念で出発し、グローバリズムを持った運動に変貌していったからだ。国際貢献はそもそも自分たちを変革する手段だったのだ。

活動は後に「カラモジア運動」として国内で知られるようになるが、加藤憲一さんという青年が鹿児島で起こした「辺境からの挑戦」(毎日新聞刊)である。ちなみに、加藤さんを小生は個人的に良く知っており、彼のボランティア活動は最初から第三者として時折現場に赴き目撃者になることができた。

加藤さんは1970年代に米国に留学し、帰国後、暫くは東京の国際交流団体などで当時すでに芽生えていた日米経済摩擦問題に取り組んでいたが、地方と世界を結ぶ地域主義を軸にアジアとの交流を深める「南方圏構想」を暖めていた。

その構想とは彼の言葉を借りれば「草の根交流、地球人の育成、アジア太平洋時代への参画、南北問題への対応」。1981年東京を去り鹿児島に帰り、構想の第一章が幕を開けた。「国際草の根交流」のネーミングは「からいも交流」。カライモは江戸初期に南方から琉球を経て鹿児島に伝ってきた。加藤さんによれば、カライモは「有る時は食糧。有る時は飼料・原料として郷土の産業・文化を育て、薩摩人の生活のシンボルとなってきた」。カライモのように、鹿児島は海外交流の恩恵を十分に活用し、日常生活に「なじませてきた」。

では第二のカライモとは何か。それは「人」である。世界中の在日外国人留学生を鹿児島に招き壮大な交流を起こす。留学生は「風人間。地域の人々は「土人間」。土着と世界を結ぶ「からいも交流となる」と加藤さんは語る。

からいも交流の柱は何か。日本の都会に居る外国人留学生を鹿児島の農家などに短期間ホームステイさせ、農作業などを通じて田舎の日本を実体験してもらう。当時日本にいる留学生は1万5千人。多くは都市に住み、その9割がアジア系。彼らの留学体験が母国の対日イメージ形成に及ぼす影響力は極めて大きい。だから、日本を幅広く理解してもらう上でも地方の「空気」に接してもらう、と加藤さんは考えた。

ここまでならば普通の「国際交流」だが、加藤さんの構想は、自己変革、地域再生の起爆剤としてとらえる理念に基づくものだった。留学生を招き入れることにより、自分達も変わっていきける。地域も国際化に目覚める。当時、毎日新聞の安部元論説副委員長は、「辺境からの挑戦」で「上意下達の村社会に、からいもの根のような下意横達のコミュニケーション・ネットワークができあがり、・・・自立した市民の共同体に変貌し、・・・」。加藤さんの狙い通り、各国の留学生が村々に持ち込んだ風が国際化ショックを起こし、ホームステイの割り振りやイベントの試行錯誤を通じて、それぞれが自分の頭でものを考え、みんなで相談し合ってことを決めるシステムが、いつの間にか作りあげられてしまったのである」と語っている。

加藤さんの「交流の基本理念」は、「画一に対する個別と多様性、集権に対する分権、中央に対する周辺、都市に対する農村、国権に対する人権」。明治の近代化いらい軽んじられてきた諸価値に新しい光が当てられた。そして、その中で栄養に富んだ表土を運ぶ「風人間」、それを受けて大地を豊かにする「土人間」という理念だ、と阿部さんは喝破した。

国際交流で変革の嵐を巻き起こす。その火薬となるものは異文化衝突だ。

「ガイジンが来れば、うっ殺されるぞ」。外国人など見たこともなければ、太平洋戦争時代の「鬼畜米英」の脅迫観念をシャワーのように脳細胞に浴びた老人達。ガイジン恐怖症だ。受け入れ家庭の反応の千差万別だった。まさに「黒船来航のような大騒ぎ」。長い髭を生やした西ドイツ人学生を引け受ける家では、写真を見て、「髭が気持ち悪い。アメリカ人に変えてくれ」「髭を剃ってもらう」と早速強烈な拒否反応。

「鹿児島では、『髭を生やしているとドロボーと間違われる』と留学生に嘘をつき、何とか髭を短くさせ、農家に受け入れてもらったが、今度は焼酎攻めの歓待に会い、プログラム途中で逃げだそうとする始末。それを引き止め、最後に深い感謝の念を込めた気持ちを、弁論大会で述べるに至るまでの、ボランティアの人々の涙ぐましい努力が「辺境からの挑戦」に詳しく書かれている。

見たことも聞いたこともなかった習慣。宗教観や考え方の埋められそうにない深い溝。驚きと戸惑い。「ガイジン、ガイジン」と叫ぶ子どもに眉をひそめる留学生。外人を見るとロボットと言う子がいたり、チリでは入浴は朝か昼と聞き、驚天動地の衝撃を受けた農家の人々。だが、衝突しながら、新鮮な発見をする毎日が鹿児島の土壌で繰り広げられた。

痛みを伴う文化摩擦の代償として受け入れ家庭が期待したものは何か。子供の教育だった。田舎には子供に教えてくれる家庭教師もなく、勉強塾もない。だが、留学生を受け入れることにより世界に繋がる故郷を作れる。交流により子供が世界に目覚めて、海外に関心を持ち、友好の架け橋になってくれれば。

「非常に上手くいった家庭、まあまあの家庭、うまくいかなかった家庭」など色々あったが、49軒中、20軒が次年度の受け入れを希望したと、加藤さんは本の中で報告している。その理由は、「交流を通じて国際的視野を持った人間になる」と受け入れ家庭の人々が考えていたからに違いない。

「外人」に対するイメージも変わり始めた。「国や言葉の違いで、人間を判断するのは間違い。外人は米国人としか思わなかった視野の狭さ。東洋人であることを自覚する必要性。」「西洋崇拜の幻想が消え、アジア蔑視の偏見の

是正に役立つ」とカライモ交流の人々は様々な感想を語る。世界各国から来た留学生も、新たな「日本発見」に感激する。「鹿児島に行き、人をもてなすことの大切さ学んだ。東京では学べないことがたくさんある」。それを聞いた人たちは、「自分たちの郷里もすてたもんじゃなか」と故郷への誇りを取り戻す。まさに互惠こそ交流の原点。英語の意味では、貢献は一方が他方に施すニュアンスが強いのは異質の世界だ。

からいも交流が始まって3年で、延べ250校、1万3千人の児童が留学生との交流を体験した。文部省推薦、自治体後援の交流とは無縁の土の匂いがするボランティア運動だ。交流の成果は言葉や感性の世界で感じたものだけに留まらない。行動にも広がる。からいも交流に参加した留学生の国マレーシアに、休みを利用して小学5年生が一人旅をするなど、「からいも地球人」が産声を上げ始めた。

加藤さんたちが立ち上げた地域起こしの波は農民、漁民、住職、教員、経営者、役場職員などを巻き込んでいく。休眠状態だった村の青年団の復活もあれば、国際交流の発展を願って、「からいも交流友の会」の結成が自然発生的に地域住民から生まれてきたり、留学生のホームステイを通じてささやかな国際化の波に洗われ始めた鹿児島のシラス台地は、外の世界に向かって大きく扉を開いた。国際貢献の大海に乗り出す船の母港に変貌しつつあった。彼らの船はどこへ向かうのか。アジアだった。「からいも」と「アジア」を合わせた合成語「カラモジア運動」の幕開けである。

「カラモジア交流アジア会議をやろうよ」「アジアのNGOと手を結ぶ必要がある」「草の根交流から農村交流へ。そして、技術移転を通じて、アジアの村おこしをやろう。地方型共存共栄モデルづくりに挑戦」と農家の青年達の夢は大きく膨らむ。

「日本政府、日本企業の援助は底辺を潤していない。日本の農村こそが農業国家のアジアと結びつきやすい」との認識は正鵠を得たものだった。

1985年鹿児島の農業青年7人がタイの極貧地帯である東北部を訪れる。帰国後、水牛銀行支援基金設立。水牛購入の資金援助への募金活動開始し、足踏み脱穀機を送った。鹿児島の小さな町、根占町がタイとの農村交流を担うまでになった。

国際貢献の裾野はそれだけに留まらない。隣国との「歴史的和解に向けた」小さな一歩を自分達の手で進めたい。カラモジア運動を担う純粋な志士達の目が朝鮮半島を見つめる。韓国中央大学の教授から一通の手紙が来たのは1986年の暮れのことだった。手紙には、「朝日新聞でからいも交流のことを知りました。やっと肩肘をはらずに韓日双方が交流し、理解し合う世代が

登場してきたことを大変嬉しく思います。ここ韓国で日本語や日本文化を学ぶ学生にも同様の機会を是非」とあった。

日韓の歴史的傷口は民間交流で少しずつ癒していける。かくして、からいも交流のメンバーによる日韓「こぐま交流」が展開する。ちなみに「こぐま」はハングル語で「サツマイモ」のことである。第一回の交流は韓国から学生23名が鹿児島を訪れた。プログラム半ば、一人の老人が現れた。太平洋戦争中、特攻基地のあった鹿屋には、多くの朝鮮人労働者が強制連行され、病気や空襲で命を失くした人たちがいる。その老人は彼らの霊を黙って弔ってきた人だ。老人の存在を知り、韓国入学生がどのような感慨を胸に抱いたのか。以後、今日までに彼らの対日観どう変遷してきたか興味が湧くところだが、草の根交流でしかできない日韓両国の和解へ向けた小さくても重要な一歩だ。これが政府主導だとなんとも芝居がかって見えるだろう。

1981年に鹿児島の地で種が蒔かれた「からいも交流」は、5年後には県下25市町、5万人の児童、生徒が参加するまでに成長した。折りしも米の自由化問題など、国際経済の嵐が日本の農村社会を根幹から揺さぶっていた。任意団体の「南方圏交流センター」の財政基盤安定化を目指して法人化に成功する傍ら、農産物自由化にどのように農村は対応すべきかを問う「マグマ会議」などを意欲的に開いた。農業を蘇生するには、まず意識改革をと考えた。

1987年、坂本竜馬の海援隊になぞらえた農援隊が誕生。農の連帯をグローバルに広めようとのグラント・デザインの下、カラモジア大学、カライモロード 情報データベース コミュニティー再生に取り組むことを「マグマ会議」で決めた。

カラモジア大学は、アジアの農村リーダーを一年間研修生として鹿児島の農村家庭が引き受け、日本とアジアの農村で相互に人材育成を行い、アジアの地域発展に貢献する。カライモ交流や日韓こぐま交流は今後もカライモロードとして継続する。農作業、農業ビジネスに必要な情報をデータ・ベース化する。最後に、「循環型農村再生」を目指すことなどだ。

カラモジア大学留学の第一期生は貧しいタイ北部にあるタラ村の青年スリヤだった。元号が昭和から平成に変わった年、加藤さんたちは、フィリピン・ラグナ州トンカ村に、研修機関としてのカラモジア・フィリピン大学を開校し、現地農民の技術や生活の向上に協力することになった。

その年の6月1日、朝日新聞に「比の農地解放、農民の手で一鹿児島の青年グループが『里親』に」が掲載された。「鹿児島県を中心に国際交流による村おこし運動を続けている農村青年グループが、フィリピンの農地解放を支援する基金作りに乗り出した。貧困に苦しむフィリピンの小作農に農地購入

資金を融資、15年～20年で返済してもらう仕組み。さらに現地の農民を各農家が研修生として受け入れ、農地取得後の生産技術の向上にも力を貸す。同国の農地改革省が全面協力しており、すでに今年4月から第一陣の研修生5人が同県内の農家で1年間の研修に入っている。——フィリピンからの研修生5人は、それぞれ農援隊のメンバーの家に泊まりこんで、牛の世話や田植え、野菜栽培に汗を流している。」

1990年、鹿児島県は加藤さんたちの描くグランド・デザイン、カラモジア構想を長期総合計画とし、県議会がこれを認めた。自治体は当てにせず農家の青年達が手作りで始めた運動に県が乗るという異例の流れだった。同構想の下、カライモ交流地域一帯を、アジア・太平洋農村交流のメッカにしようという計画の柱は、途上国と鹿児島県の農業や農村振興になう人材育成、異文化交流による生涯学習拠点形成、異文化ソフトリゾートの形成などになった。

民主導で自治体を巻き込み、次に組む相手は、国連、企業、霞ヶ関だった。

1997年、国連開発計画の要請で、加藤さんたちはミャンマーのシャン州を訪れた。取り組む問題は貧困と環境破壊。山岳に住む少数民族の伝統的な焼畑農業が森林を破壊し、そのため表土が流出し作物の収穫量が減り、州内の豊かな水がめであるインレ湖は生態危機の病に冒されていた。

シラスの侵食と貧困を克服してきた南九州の歴史を参考に、加藤さんたちは、化学肥料を使用しない合鴨農法による水稻栽培や有機肥料作りなどを指導することになった。シャン州再生への試みには、九州電力も巻き込んだ。インレ湖流域の植林事業に対する資金援助に踏み切ったのだ。環境庁もカラモジアのインレ湖流域再生計画の後押しをすることになった。

カラモジア運動はアジアからアフリカの沿岸も洗うようになっていった。1998年に鹿児島でアジア・アフリカ共生会議を開催。JICAは、カラモジアに東アフリカ諸国を対象にした特設研修コースの作成を依頼してきた。生態系の循環型を前提にした環境保全型農林業の確立を目指したものだ。同年、加藤さんたちは、ミャンマー政府と一緒に、世界最大のケシ栽培地帯で、農業開発を指導し、麻薬撲滅に取り組むことにもなった。

加藤さんたちが示した運動の軌跡は、今後の日本人が世界と関わる上で、一つの指針になる。ハーバード大学のエズラ・ボーゲル教授は、「世界が急速にグローバル化する時代、国際間の人と人の掛け橋はまだ巨大な変化についていけるほど強靱ではありません。そんな中、『からいも交流』は今や72カ国、3200人に及ぶ留学生のネットワークを広げ、日本と世界を結ぶ大きな絆を築き上げています。人類は21世紀をどう生きるべきか。加藤君が20年

の時を刻みながら模索した運動は、人類の進むべき方向を教える画期的なものだと思います」と加藤さんの本で、絶賛している。

「日本の国際化が進まないのは自立した個人が支える市民社会が存在せず、ムラ社会の意識と行動で生きているからだ。カラモジア型NPO社会とは、ムラ国家の本性である排他性やもたれあい、ナアナア主義、マアマアの曖昧さを異文化衝突で外に開放し、目覚め、自立、連帯、共生の精神に根ざした教育、文化、経済、政治を創造する社会」と加藤さんは本の中で語っている。国内では地方の自立を前提にした分権化は今も遅遅として進まず、外交は冷戦後の世界的大変動への対応で、未だに新たな羅針盤を見出せないでいる日本。そん中でカラモジア運動が示した軌跡は、これからの日本人にとって貴重な遺産だ。